The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	顧野王『玉篇』の新研究　文献学的、音韻学的考察
Author(s)	澤田, 達也
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49470
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏　　名	澤　田　達　也（さわ だ たつ や）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２３２３６　号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**顧野王『玉篇』の新研究　文献学的、音韻学的考察**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　佐々木　猛 （副査） 教　授　杉村　博文　　教　授　岸田　文隆 文学研究科准教授　岡島　昭浩　　神戸市外国語大学教授　太田　　斎

論　文　内　容　の　要　旨

本論は、6世紀に成立した字書『玉篇』について、そこに収録される反切音注に基づきながら音韻学的考察を進めるとともに、関連する諸資料についてその文献学的性格及び相互の系統関係を解明することを目的とする。

本論で扱う字書『玉篇』とは、南朝・梁の大同九年（543年）、顧野王によって編纂されたもので、楷書を主体として編纂された字書として最古のものである。収録される約16000 字に及ぶ掲出字にはそれぞれ詳細な義注と反切による音注が附されており、特に反切音注は中国語音韻史、とりわけ漢字音研究の起点となる中古音系研究の重要な資料となる。しかしながら、原本『玉篇』は既に失われており、現在は原本と同系統とされる数種類の残巻資料のほか、『玉篇』を基礎として成立した日本の古辞書類および諸典籍に引用された『玉篇』佚文と考えられる資料などの関連諸資料からその原貌を窺うしかない。但し、これらの資料の種類、形態は多岐にわたる。そこで音韻史の資料として用いる場合には、まず各種関連諸資料の性質及び相互の系統関係を明らかにする必要がある。

顧野王によって543年に成った『玉篇』は、その成立後幾度かの改編を経て宋代の『重修玉篇』に至ったことが知られる。史料によれば最も初期の改編は蕭愷によるものであり、『梁書・蕭子恪傳』附「蕭愷傳」に、「先是時太學博士顧野王奉令撰玉篇，太宗嫌其書詳略未當，以愷博學，於文字尤善，使更與學士刪改」とあることから、成立後ほどなくして改訂が加えられたと考えられている。このときの改編は蕭愷が梁の大清二年(548年)に卒していることから、『玉篇』成立後、五年以内に行なわれたことがわかる。

その後の改編状況については、宋・大中祥符六年(1013年)修訂の『重修玉篇』を底本としたと考えられる『大廣益會玉篇』の巻首に掲載される以下のような文章から窺うことが出来る。

> 「梁大同九年三月二十八日，黄門侍郎兼太學博士顧野王撰本。唐上元元年甲戌歳四月十三日，南國處士富春孫強增加字三十卷。凡五百四十二部，舊一十五万八千六百四十一言，新五万一千一百二十九言，新舊捻二十万九千七百七十言」

ここから、『玉篇』は唐・上元元年(674年)、孫強という人物によって増訂されたということがわかる。孫強は富春（今浙江省富陽県）の人であったことが上文より知られるが、孔仲温2000によれば孫強の名は、宋・郭忠恕『汗簡』に『集字』の編者として引かれ、また、宋・夏竦『古文四聲韻』には『孫彊集』が引かれるが、その著者孫彊と同一人物であるという。

孫強による改編以外にも、宋代以前には釋慧力撰『象文玉篇』、道士趙利正撰『玉篇解疑』等の書が存在していたことが宋・慶暦元年(1041年)に成立した『崇文總目』の記載によって知られるほか、敦煌・吐魯番より出土した数種類の残葉等から、唐代には様々な形態の『玉篇』が存在していたことを知ることが出来る。また、9世紀末に成立した藤原佐世編『日本國見在書目録』に『玉篇抄十三巻』という記載がある。この書は『玉篇』の節略本であると考えられている。『玉篇抄』については、宋の樓鑰「跋宇文廷臣所蔵呉彩鸞玉篇鈔」にも唐大和年間のこととして仙女呉彩鸞の伝説と関連付けて引かれており、ここからも唐代には『玉篇』を何らかの形で抄録したエディションが存在していたことが窺える。

孫強以降の改編については、唐代には具体的な記録はないものの、宋代に入ると大中祥符六年の修訂以前にも数度に亘る改訂作業が行われたことが知られている。

本論では上記のような『玉篇』の変遷をも踏まえながら、主に原本『玉篇』に依拠したとされる残巻各資料、『玉篇』を抄録されたとされる『篆隷萬象名義』、諸資料に引用された『玉篇』佚文、吐魯番より出土した『玉篇』残片等を対象として論考を進める。

本論各章の概要は以下の通りである。

第一章では、原本系『玉篇』残巻本所収反切を主な対象とし、その反切用字の使用状況の分析を通じて残巻本各資料の系統関係の解明を試みた。本章では特に反切上字を対照として、各声母において反切として用いられる字種の各資料における分布を表によって示した。分析の結果、少なくとも反切用字の使用状況からは各資料間に系統上の大きな違いは見出せなかった。従って現存する残巻本各資料を扱う際には、これらを同一系統の資料と見なして音韻史研究の材料として利用することが可能であると判断できる。

第二章では、『玉篇』佚文資料のうち、まとまった用例数を有する『新譯花嚴經音義私記』、『大乘理趣六波羅蜜經釋文』、『三教指帰成安注』所収の反切を対象に、その反切用字の使用状況を分析することを通じて佚文資料間の系統上の異同および残巻本との関係について考察した。分析の結果、少なくとも反切用字の使用状況を見る限りは、本章で扱う三種の佚文資料に大きな系統上の差異は見出せなかった。また残巻本との間にも大きな相違は確認できなかった。従って、佚文資料のうち少なくとも『新譯花嚴經音義私記』、『大乘理趣六波羅蜜經釋文』、『三教指帰成安注』に関しては同一系統の資料と見なして音韻史研究の材料として利用することが可能であると判断できる。

第三章では、『玉篇』の抄録であるとされる空海撰『篆隷萬象名義』所収反切の特徴について、『切韻』系韻書の反切との比較を通じて考察し、そこに反映される音韻特徴に関して主に以下のような結論を得た。

1.『篆隷萬象名義』反切が表わす音系において唇音が「軽唇音化」を起こしているように見えるのは、実は『切韻』系韻書の反切と同様反切用字の使い分け、すなわち「類相関」現象が見られるためであること。すなわちその点では『玉篇』と『切韻』系韻書の反切には共通性が見られること。

2.三等韻帰字に対して一等韻上字が用いられる例がまま見られるが、これは『玉篇』反切が『切韻』系韻書の反切とは異なる特徴を有することを示しており、『玉篇』反切の表す音系においては三等韻口蓋介音が弱化していた可能性を示すものであること。

第四章では、『玉篇』目録の断片である吐魯番出土断片Ch1744について、その書誌学的体裁や標出字の字体、反切音注等に関し、『篆隷萬象名義』、『大廣益會玉篇益會本』との比較対照を行い、その成立年代及び宋代以前の『玉篇』改編過程における位置づけについて考察を試みた。考察の結果、当該断片は唐代後期から五代半ばの資料であることが判明した。また当該断片と同系統のエディションが宋代における『玉篇』修訂の際に利用された可能性についても指摘した。

第五章では、原本系『玉篇』残巻本と『篆隷萬象名義』に収められる義注の体例に着目し、残巻本と『篆隷萬象名義』の体例上の差異に関する比較分析を通じて両資料の系統関係を考察した。具体的には『玉篇』に引用される種々の経典から『篆隷萬象名義』がどのような基準で注文を選択したかに関して、比較的多くの用例を抽出可能な巻九所収「言」部と巻二十七所収「糸」部について論じた。分析の結果、調査範囲が狭いために未解明の部分は多いものの両者の間には義注の採択基準に差異が見られることを指摘し、その理由の一つとして両資料が依拠した経書の規範に違いが存した可能性を論じた。

第六章では、上述の各章とは異なり、『玉篇』成立以前の状況を問題とした。主に原本系『玉篇』残巻本を考察の対象とし、その内部構成の分析を通じて『玉篇』反切の来源について探求した。分析の結果、『玉篇』各部首の構成は大きく前半の「説文依拠部分」と後半の「非説文依拠部分」に分かれ、後半については更に最末尾において資料の引用傾向が異なることを明らかにした。また、顧野王が後半部分の掲出字を採録するに当たっては、特に『埤蒼』、『字書』、『字指』の3資料が重要な依拠資料となった可能性を指摘した。

また、以下の通り、本論の論考に関聯する各種資料を付録として末尾に附した。
【付録１】『玉篇』水部所収反切対照表
【付録２】原本系『玉篇』残巻切韻譜
【付録３】『玉篇』残巻巻22　義注引用書分布表
【付録４】『玉篇』残巻所蔵出版状況表

論文審査の結果の要旨

本論文の目的

6世紀に成立した字書『玉篇』について、その関連諸資料の性質及び相互の系統関係を検討し、その音韻研究の資料としての性質を解明、確定することにある。『玉篇』に掲出される反切が反映する音韻体系については従来多くの研究があるが、関連諸資料の性質について全般的に詳細な検討を試みたものはほとんどない。その点が本論文の独創的な点である。

先行研究

『玉篇』を対象とした研究は数多く存在するが、本論の問題設定に関わる主要な研究は以下の通りである。

・音韻学的研究

周祖謨「萬象名義中之原本玉篇音系」（1936年）

『篆隷萬象名義』（以下『名義』と略称）の反切を『玉篇』反切と見なし、系聯法を用いてその音韻体系の解明を図っている。分析の際には『名義』（全6帖）全体を同質的な資料として扱っている。

河野六郎「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」（1937年）

周祖謨1936と同様、主に『名義』を用いてその音韻体系の解明を図っている。その結果は周祖謨氏とほぼ同様である。資料の扱いについては、現存する残巻が原本でない可能性を指摘しているが、判断は下していない。

・文献学的研究

岡井慎吾『玉篇の研究』（1933年）

『玉篇』関連諸資料について主に書誌学的立場から研究している。残巻諸本の系統関係について、巻首目録の体裁の違いから同系統ではない可能性を示唆している。

貞苅伊徳「玉篇と篆隷万象名義について」（1958年）

反切用字の比較によって残巻諸本と『名義』の親疎関係について検討を行っている。

上田正「玉篇残巻論考」（1970年）

貞苅1958 の研究を基礎に、『切韻』系反切などを参考にして、反切用字の「新旧」を比較し、各残巻の新旧と『名義』の前後半で依拠した『玉篇』に違いのあることを指摘している。

宮澤俊雄「図書寮本類聚名義抄に見える篆隷萬象名義について」（1973年）

『図書寮本類聚名義抄』に引かれる注を分類し、「弘云」と掲出されたものは主に『名義』前半からの引用、「玉云」と掲出されたものは主に『名義』後半からの引用であると指摘している。また残巻本、『名義』、『図書寮本類聚名義抄』等、『玉篇』関連諸資料について相互の系統相関図を揚げており有用である。

1995年には、周祖庠氏がその著書『原本玉篇零巻音韵』で『玉篇』残巻を対象としてその音韻体系を整理しているが、やはり資料の問題は顧慮していない。

資料について系統問題等の問題が既に指摘されている以上、音韻研究を進める際にもその問題を踏まえるべきであると考える。本論文ではその点を深く考慮している。

本論の構成

全6章から成り、末尾に「付録」として関係資料等を附している。

第一章から第三章は『玉篇』諸資料の反切を対象にしている。

第一章では『玉篇』残巻諸本所収の反切を主な対象とし、反切上字の使用状況の分析を通じて残巻本各資料の系統関係解明を試みた。全体的な分析を行って各資料間に系統上の大きな違いは見出せないことを発見した。従って少なくとも反切用字の使用状況からはこれらを同一系統の資料と見なして音韻史研究の材料として利用することが可能であると判断できるという。

第二章では『玉篇』佚文資料のうち、まとまった用例数を有する三資料の反切を対象に、その反切上字の使用状況を分析した。その結果、三種の佚文資料に大きな系統上の差異は見出せず、また残巻本との間にも大きな相違は確認できなかった。従って、これらの資料については同一系統の資料と見なして音韻史研究の材料として利用することが可能であると判断できるという。

第三章では『玉篇』の抄録であるとされる『名義』所収反切の特徴について、『切韻』系韻書の反切との比較を通じて考察し、そこに反映される音韻特徴に関して、①『名義』反切では『切韻』系韻書の反切と同様反切用字に「類相関」現象が見られ『切韻』系韻書の反切との共通性が見られること。②但し、三等韻帰字に対して一等韻上字が用いられる例がまま見られ、この点では『切韻』系韻書の反切とは異なる特徴を有することを示していると考えられることを指摘した。

第四章では、従来詳細な研究が行われていない吐魯番出土の個別資料（Ch1744）を対象にその書誌学的体裁や標出字の字体、反切音注等に関し考察を行い、さらにその成立年代及び宋代以前の『玉篇』改編過程における位置づけについて考察した。考察の結果、当該断片は唐代後期から五代半ばの資料であることが判明した。また当該断片と同系統のエディションが宋代における『玉篇』修訂の際に利用された可能性についても指摘している。

第五章・第六章は『玉篇』の義注内容を対象に考察を行っている。

第五章では、残巻諸本と『名義』から「言」部と「糸」の一部を抽出し、その義注項目の採択基準について両者を比較し、相互の系統関係について考察した。その結果、両者の間には義注の採択基準に若干の差異が見られた。その理由の一つとして両資料が依拠した経書の規範に違いが存した可能性を考えている。

第六章では、残巻の巻十二を対象にその義注に引用される諸資料の分布状況を基に『玉篇』反切の来源について考察した。その結果『玉篇』各部首の構成は大きく前半の「説文依拠部分」と後半の「非説文依拠部分」に分かれ、さらに後半については最末尾において資料の引用傾向が異なることを明らかにした。また、顧野王が後半部分の掲出字を採録するに当たっては、特に『埤蒼』、『字書』、『字指』の三資料が重要な依拠資料となった可能性を指摘している。

本論文の結論

『玉篇』関連書資料のうち、残巻諸本及び佚文資料については反切用字の使用状況から判断する限り同一系統の資料であると見なすことが出来た。従って、『玉篇』を音韻研究の資料として使用する際にはこれらの資料を一括して扱うことが可能であることが判明した。但し『名義』については義注体裁の面から残巻諸本とは異なる系統であったことが伺える。先行研究で残巻諸本との差異について言及されていることも含め、今後の課題となるテーマである。また、吐魯番出土文書（Ch1741）は他

の諸資料とは異なる系統のものであり、宋代の重修本の底本となった可能性がある。『玉篇』反切の構成については、基本的には『切韻』系韻書の反切と相似した特徴を有するものの、一部に『玉篇』独自の特徴が存することが見出された。
また、『玉篇』反切の来源については、六朝期の小学書との関連性を指摘した。
　従来『玉篇』残巻諸本及び逸文資料については、その同一性について十分な検討を行うことなく音韻学の基本資料として扱って来たが、本論文における詳細な検討によって初めて残巻諸本及び逸文資料の同一性が証明されたのである。
　五名の審査委員は慎重に審査した結果、本論文は本学に於いて博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものとの判断に達した。